

自己効力感・自己有用感を高める家庭科授業の工夫 ～三条市小中一貫教育への取組を通して～

新潟県 技術・家庭科研究会

三条市立第三中学校 瀬戸 友子

1 はじめに

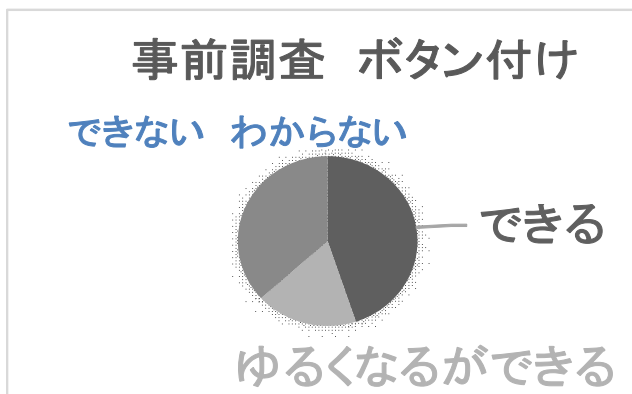
三条市では平成20年度より小中一貫教育に向けた取組として、教職員児童生徒の交流を図り、系統性を見通したカリキュラム編成や授業実践を進めてきた。特に、小中の接続期である小学5年～中学1年にあたる時期を「情緒面の発達が著しく、自尊感情や自己肯定感が維持できにくく、環境の変化への不適応感や人間関係の悩みを抱える子どもが多くなる時期である」ととらえ、異学年交流活動によるサポートが試みられてきた。

家庭科学習が始まる小学校5年生からは、まさしく、小中の接続期にあたる。技術・家庭(家庭分野)の目標には「これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てる」とある。技術・家庭科の授業には子どもたちが発達段階の課題に立ち向かい、乗り越える力をも高めていく可能性を持っていると考え、本研究のテーマを設定した。

2 研究テーマ設定の理由

(1) 自己効力感について

当校の1年生に行った本研究の事前アンケート結果では、「ボタン付けができない、わからない」と答えた生徒が、34人平均の1クラスあたり10人を超える人数であった。



小学校での既習事項にもかかわらず自信を持って答えることのできない生徒が約3割である。学習で身につけた技術と生徒の自信との関係については、平成23年度に市内9校の中学1年生を対象に実施した食生活のアンケートでも、「(調理することは)好きだが、自信がない」生徒が多いと分析されている。

自己効力感とは、カナダ人の心理学者アルバート・バンデューラが提唱し、社会的学習理論の中で紹介されたものである。ある行動を起こす前に感じる「できそう!」という気持ちや、「自分にはこれだったら、ここまでできるんじゃないか」という考えが自己効力感であり、自己効力感が低くなると「自分はきつとうまくできない」という気持ちが強くなり、やる気がなくなってしまい行動も起こさなくなるといわれるものである。

子どもたちにとって、作品製作や実習を通して「できた!」という達成感を味わうことや、自分は「できる!」という自信や体験を多く持つことで高められた自己効力感は、「課題を持って生活をよりよくしようとする」大きな原動力になると考える。

(2) 自己有用感について

第三中学校区の全体の研究を受け、技術・家庭科でも自己肯定感や自己有用感を育成できるよう、小中の異学年交流活動を展開していく。

自己有用感とは、「他者との関係の中で『自分は役に立っている』など、自分の存在を価値あるものと受け止められる感覚のことで、これがあれば、他者との関わり合いを否定せず、他者との関係を保ち続けられるように努力できる」と考えられるものである。

家族・地域など人との関わりの中で生きていく子どもたちにとって、自己有用感はよりよい関係

を目指して行動できるようになるためのベースとなる感覚であると考え。学習を通して身につけた技術を生かし、現在の自分ができること「自分が役に立っている」と思えるような体験を重ねていくこと。そして、自己有用感を高めていくことは、これからの生活の中で生じてくる課題を解決するために、工夫したり新しい技術を習得しようしたりする力になると考える。

3 研究計画

(1) 系統性を見通したモデルカリキュラムの作成

小・中の各題材毎に「学びの履歴」「学びのつながり」を明らかにし、「9年間の学びにおける価値」を検討する。

(2) 小中家庭科担当教員の合同研修会

モデルカリキュラムの確認や児童生徒の実態を共通理解し、小中での児童生徒・教職員の交流授業等を検討する。

(3) 小中の異学年交流活動を取り入れた授業

「ボタン付け」をとりあげ、中学生が小学生に教えることを通して、生徒の技術の確実な定着を図るとともに、自己効力感・自己有用感を高める

ことをねらいとした授業を実施し、その効果を検討する。

「人に教えること」は平均学習定着率が90%と高い(米国 National Training Laboratories の調査による)。生徒同士の教え合いは、これまでも試みてきたが、できない生徒はやはり「教えられる側」の立場のままであることが多いように思う。どの生徒も「教える立場」を体験し、技術をしっかりと身につけてほしいと考え、中学校1年生と小学校5年生の異学年交流活動として「小学生にボタン付けを教える」場を設定した。1人の生徒が1~2人の児童に教えることにより、児童への個別対応も可能になる。

4 研究の実際

(1) 系統性を見通したモデルカリキュラム

中学校1年で設定した題材「生活を豊かにするために」のカリキュラムを表1に示す。

「学びの履歴」の欄には小学校の学習内容を、また、「学びのつながり」では、その後、どの題材につながっていくのかを記載した。三条市は「ものづくり」を大切にしてきた地域の伝統的な背景

三条市 小中一貫教育 《技術・家庭科(家庭) 指導計画》 【中期】 中1年						
月	学びの履歴	題材	ねらい	主な指導内容	学びのつながり	中学校区の留意点(関連・交流・人材活用等)
1月 ~ 3月	<p>【小5年】 「はじめてみようソーイング」</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆形や縫い方を工夫し製作している。 ■簡単な手縫いやボタンをつけることができる。 ■小物を製作することができる。 △用具の安全な使い方がわかる。 【わくわくミシン】 ◆目的に応じて縫い方を考えたり、工夫したりしている。 ◆作ろうとするものを考えたり、その製作計画を工夫して立てたりしている。 ■ミシンを安全に使って直線縫いで製作することができる。 ■製作する物の製作計画を立てることができる。 △ミシンの安全な取り扱い方が分かる。 △製作に必要な材料や用具、製作の手順が分かる。 <p>【小6年】 「生活を楽しくしようソーイング」</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆生活に役立つ物を工夫して製作している。 ◆目的に応じた縫いや手順などを考えたり工夫したりしている。 ◆手作りの布製品を工夫して活用している。 ■生活に役立つ物の計画を立てて製作することができる。 ■目的に応じた縫いや手順で製作できる。 ■製作の技能を、日常の生活に生かすことができる。 △製作計画を立てて、適切な製作方法が分かる。 △製作に必要な用具の安全な取り扱い方を理解している。 △布製品のよさが分かる。 	<p>教科書 P144</p> <p>生活を豊かにするために</p>	<p>◎布を用いた物の製作を通して、生活を豊かにするための工夫ができる。</p> <p>◎衣服または住まいに関心を持ち、課題をもって衣生活または住生活について工夫し、計画を立てて実践することができる。(10時間)</p>	<p>○布を用いた物の製作に関心をもって取り組み、家族や自分の生活をより豊かにしようとしている。</p> <p>◆衣生活や住生活を豊かにするための製作品を考え、製作計画や方法について自分なりに工夫している。</p> <p>■安全に用具を取り扱い、目的に応じた縫い方で製作することができる。</p> <p>△材料や用具の適切な選択や、用具の安全な取り扱いに関する知識を身につけている。</p>	<p>【中2年】 「環境に配慮した消費生活」</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆環境に配慮した消費生活について考え工夫しようとしている。 ◆循環型社会を目指し生活のあり方を工夫し、実践しようとしている。 △環境に配慮した生活を送る必要を理解している。 <p>【中3年】 「幼児の成長と家族」</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆幼児の発達段階を押さえた遊び道具を工夫し製作することができる。 △幼児の心身の発達と生活の特徴について理解している。 △心身の発達には一般的な傾向や順序性があることを理解している。 △幼児の心身の発達に応じて、周囲の大人が適切に関わり、身につけさせる必要があることを理解している。 △幼児にとつての遊びの意義を理解している。 △幼児にとつて遊びは生活そのものであることを理解している。 △遊びは、身体の発育や運動機能、言語、情緒、社会性などを促していることを理解している。 	<p>【中学校区重点指導内容との関連】</p> <p>【連携型における留意点】 小学校での学習内容・技能の定着状況などを確認して連携する。</p> <p>【他教科・他領域との関連】 短時間でできる小物製作などを中2、中3でも取り入れ製作の技能の定着をはかる。</p> <p>【学校行事・地域行事との関連】</p> <p>【地域素材・地域人材の活用・交流】</p> <p>【その他(年間通した「帯化」した扱い、発展的な学習など)】 小中の異学年交流活動の場を設け、中学生の技能向上と定着に活かす。</p>
<p>【9年間の学びにおける本単元の価値】</p> <p>本題材は、中学校での布を用いた製作学習で、小学校で学んだ知識や技術を活用して製作に取り組み、確実な習得につなげる機会となる。</p> <p>これまでに生徒は、手縫いやボタン付け、ミシン縫いを学習し小物を製作してきた。</p> <p>ここでは、補修の技術を活かした製作品を考え、手縫いやミシン縫いの技術を活用して製作していく。</p> <p>このことは、【中2年】「環境に配慮した消費生活」や【中3年】「幼児の生活と家族」の学習を生かして、生活を豊かにするため自分なりに工夫し、製作していくことにつながる</p>						
○関心・意欲・態度 ◆創意工夫 ■生活の技能 △知識・理解(生活科の◆は思考・表現、△は気付き)						

表1 モデルカリキュラム「生活を豊かにするために」と「学びの履歴」

がある。このカリキュラムでは2, 3年生でも、布を用いた簡単な製作を取り入れる題材を想定した。

(2) 小中家庭科担当教員の合同研修会

第三中学校学区の3小学校と1中学校から各教科の担当教員が参加し、年1回、カリキュラムの活用状況や児童生徒の学習の様子、使用教材などの情報交換や共通理解を図る合同研修会を行っている。

小中学校とも技術的な指導を要する場面では、個別の対応を求めてくる児童生徒が多く、進度差に対応する時間のやりくりが難しいこと。技術をしっかりと身につけるところまで指導しきれないと感じていることなど、悩みなども話し合うことができた。

また、「小学校で習っても、家でやらないので忘れてしまう、中学校へ行ったときできなくなっているかもしれない」という予想もされていた。

小学校における学習状況の実態把握のために、中学校教員が小学校家庭科の授業にサブティーチャーとして参加することや授業見学などの実施を検討することが確認された。

(3) 異学年交流活動を組み込んだ授業の実際

① ガイダンスの工夫

当校では、新潟県版の技術・家庭科ノート（正進社）を使用している。ガイダンスのための付属の資料中にある「将来の自分について」考えるページの部分を、「現在の自分と家族や地域の人とのかかわりをライフステージから見つめ直す」課題にまで発展させている。年齢差や現在の自分の年代などを実感しながらとらえることができるよう別紙に書かせたものと併せて、学習を進める。



教科書の記述に沿って、乳幼児期・児童期の特徴を確認し、青年期・壮年期・高齢期についても教師からの補足説明をする。その後、改めて家族や地域、ともに生きる人たちの存在をとらえ直しをする。「高齢期は体が衰えてくるが、知恵の時代ともいわれる。祖父母にしてもらったことはないか。」「乳幼児期は、大人の力を借りなければ身の回りのことが十分にはできない。けれど、赤ちゃんや小さい子がいると良いことはないだろうか？」等の問いかけを行う。

その上で「現在の自分が家族に対してできること」を考えさせていく。

② 「小学生に教える」活動へつなげる

中学生の自分が家族に対してできることとして、「小学生の弟の宿題を手伝ってあげたい」という意見があった。弟や妹がいる生徒にとっては身近な関わりの状況であった。この意見を取りあげ「中学生が小学生に教える」活動へのつながりをつくっていった。

③ 「小学生にボタン付けを教える」

小学生に教えながら製作する作品は、フェルトのネームプレートとした。ボタン穴を開けておいたフェルトにボタンを付け、カバンの持ち手などに取り付けて使うことができるものである。



事前に生徒は1時間で練習し試作した。生徒は「ボタン付け」を自主的に教え合う姿が見られ、事前の調査で「できない」と回答していた生徒も意欲的に製作していた。また、教える場面での声かけなど、小学生の立場に立って考えようとしていた。異学年交流活動を行った小学校は、当学区の中で児童数が最も多く、実施したクラスの生徒の中には小学校時代に一緒に活動したことがあるなど関わりをもっていたため、事前の顔合わせや交流活動などは行っていない。

授業当日は小学校の授業時間に合わせ45分間で実施し、全体でのあいさつの後、各グループに分かれて製作を行った。



小学生にボタン付けを教える

5 成果と課題

(1) モデルカリキュラムの作成

現在、市内の各中学校区毎に行事や児童生徒の実態に合わせたモデルカリキュラムの活用や見直しが進められている。

作成を担当し、小学校からの学習内容を「学びの履歴」としてまとめたこと、「9年間の学びにおける題材の価値」を考えたことは、大きな成果があった。題材によっては、子どもたちにとって学習する最初の機会であったり、「布を用いた物の製作」のように、その後意図的に製作を取り入れなければ、その題材での学びが義務教育では最後の学習の機会となるものもある。一時間一時間の授業が生徒にとって貴重な学習の機会であることを再確認できた。

(2) 小中家庭科担当の合同研修会

小学校は年度が変わると、各校の担当者が変わってしまうが、各小学校の担当者が話し合い、共通の作品を製作したり実習が行われたりした年もあった。また、中学校の担当教員が授業を見学したり、サブティーチャーとして個別指導を補ったりして、児童のつまづきに実際に対応することもできた。年に1回の開催であっても、大変有意義

であるため継続して実施し、連携がさらに進んでいくことを期待する。

(3) 異学年交流授業と自己効力感・自己有用感

授業後、中学生のアンケートでは、玉留め玉結びなどに不安があると答えた生徒が2名いたものの、全員が「ボタン付けができる」と回答した。

生徒は事前の練習・試作で何個もボタン付けをして、できるようになろうと意欲的に取り組んでいたし、実際に教える活動を通して「自分ではできるようになった」という自信を持つことができた。

さらに、アンケートの記述より、教える時に心がけたこととして、「小学生にわかりやすく説明しようとした」「優しく励ますように声かけた」「楽しく取り組んでもらえるように工夫した」ということがわかった。

事前調査で「できない」と回答し、小学生に教える前も不安を感じていた生徒が、最後の振り返りとして「小学生がうまくできたら、自分が成功したみたいにうれしかった」「小学生がボタンを付けられるようになってよかった」「意外とすぐにボタン付けを覚えてくれてよかった。楽しかった」といった感想を残している。「自分が関わった」とことと小学生が「できた」ということが「うれしさ」につながり、自己有用感を感じることができたものと思われる。

6 まとめ

本研究では小中学校が連携した技術・家庭科の授業を通して、自己効力感や自己有用感といった生徒の内面にも働きかけ、生活をよりよくしていくとする力を高めることができるのではないかと考え取り組んできた。

異学年交流活動を継続して実施するためには、中学校の他領域や他教科との連携、小学校への協力依頼、実施に向けた打ち合わせの時間確保など、縦横とのつながりの中でどのようにしていくべきか課題は多い。けれども、技術・家庭科の授業を通して生徒が発達段階の課題を乗り越える力をも高めることができる可能性があることを、今後はデータ等の比較を行いながら、一層研究を深めていきたい。